

メディア批評

神保太郎

紆余曲折を経て遂に実現した史上初の米朝首脳会談。しかし、安倍政権の外交政策に対してははっきりと異を唱えてこなかった日本のメディアは、この歴史的な一歩の本質を見誤ってはいまいか。

連載 第128回

- (1) 歴史的な米朝首脳会談の評価を曇らせる「偏視」
- (2) メディア内部に蔓延する性暴力

世界 SEKAI 2018.8

① 歴史的な米朝首脳会談の評価を曇らせる「偏視」

ものごとをきちんとは見届けるには、目をしっかりと見開き、雑念や予見を払いのけ、虚心坦懐に、みる。そして、時間と空間の軸を縦横に行き来しながら、対象を凝視する謙虚さが大切だ。自戒をこめてそう思う。今年（二〇一八年）に入ってから、平昌五輪舞台裏での韓国・文在寅政権による平和攻勢、そして板門店での南北首脳会談を経て、冷戦終結から三〇年余りも取り残されていた北朝鮮が、ついに、自らの国のありようを根源的に変えていこうという意思を内外に示したかにもえた象徴的なシーンだったのである。それとも、二人の独裁者の演じる途方もない見世物（スペクタクル）にみえたか、対象を凝視する謙虚さをもってしても。

■米韓メディアはどう受けとめたか 六月二日、午前九時四分（現地時間。日本時間では午前一〇時四分）。シンガポールの最高級ホテル・カペラのポーチに、赤絨毯が敷き詰められ、背景の壁に沿って、まだ国交がないアメリカと北朝鮮の国旗が六本ずつ互い違いに掲げられるという、両国の歴史のなかでも前例のない特別の舞台装置が設営されていた。廊下をゆっくりと歩み寄ってきた二人のトップがポーチ中央で出会い、一三秒間にわたって握手を交わし、言葉を交わした。金正恩・党委員長は英語で「Nice to meet you, Mr. President.」と挨拶を切り出した。カメラマンのシャッター音、フラッシュの

平昌五輪について「今回の統一旗に代表される文在寅政権の融和的な動きも、北朝鮮を利用するだけの結果に終わるのではないかという危惧がある」と書くなど、一貫して北朝鮮への憎悪にも似たトーンが滲んでいた。NHKの岩田明子政治部解説委員は、「安倍首相が開催地シンガポールを進言した」だの、安倍首相はトランプ大統領の「家庭教師みたいですね」だのと、根拠不明の御用発言を繰り返していた。

■「蚊帳の外」外交に追随するメディア 少しばかり頭を冷やして謙虚に、年初以来の朝鮮情勢の変化に対する日本政府の硬直した姿勢を振り返ってみてはどうだろう。日本政府はこの間、「アメリカ頼み」「蚊帳の外」という馬脚をあらわし続けてきた。平昌五輪では「ほほほほ外交に騙されるな」などと官民あげてケチをつけまくっていたのではなかったか。日本メディアが北朝鮮の金与正副委員長長の訪韓で文政権の平和攻勢に應じると、追加取材要員を送り込んだが、やってきたことと言えば、北朝鮮の美女応援団の「密着」など、恥ずかしい取材ぶりをさらすことではなかったか。筆者はこの話を韓国メディアの人間から聞いた。

この平昌五輪期間中に、米CIAは密かに北朝鮮側カウンターパートと接触していた。行動のスケールが違うのである。一部の米メディアは、ポンペオ國務長官の二回目のピョンヤン入りに同行取材していた。日本のメディアは全くこの事実を知らなかった。この間、河野外相は外遊のたびに訪問先で

北朝鮮との断交を迫り、最大限の圧力と呼びかけ続けた。南北首脳会談や中朝首脳会談のフォローや評価にも冷淡だった。さらにはトランプ大統領が一旦は決まっていた米朝首脳会談を中止すると発表するや、「大統領の判断を尊重し支持する。日本は世界でもたった一国、会談中止を支持した」と官房長官らが自慢していたという。救いようがない。さすがに米朝会談の実現が本決まりになるや、日米首脳会談を急遽懇願し、「拉致の話もして」とお願いするしかなかった安倍首相の姿を、私たちは忘れていないか。そこには、朝鮮戦争終結後とか、朝鮮半島の非核化とか、北東アジアの安全保障環境のドラスチックな変化が起きる可能性に対して、大きな絵図を描く構想力が微塵もみられない。

官民あげて、つまりメディアも含みこんで「蚊帳の外」に置かれていた。とすれば、そのように眼を曇らせてしまったものは何なのかを真摯に顧みなければならぬ。

筆者は敢えて記すのだが、ひとつは、「拉致」問題解決をすべてに優先させることがフレーム化したことの、負の側面を直視することである。わずかに、拉致被害者の会にかつて所属していた蓮池透氏が「拉致問題の政治利用」を指摘している程度である。この問題を論じることが、日本のメディアでは半ばタブー化している。それに引張られて、日本のメディアに登場する朝鮮半島問題の「専門家」なる人選が、著しく偏っていないか。